

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13155

研究課題名（和文）社会的な課題を教材化する教師の授業実践に関するライフストーリー研究

研究課題名（英文）The Life Stories of Teachers Using Social Issues in Class

研究代表者

村井 大介（MURAI, Daisuke）

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：80779645

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ESDとも関連の深い社会的な課題を授業で取り上げる際に、教師はどのように切実さや見方・考え方を深めて希望を形成しながら実践してきたのかを明らかにすることである。教師へのライフストーリー・インタビューにより、次のことを明らかにした。教師は、自身のアイデンティティやこれまでに直面した葛藤を背景に社会的な課題を選択し、現地での調査や当事者との出会い等を通して課題への切実さを深め、課題を捉える見方や実践方法は他の社会的な課題を取り上げる際に転移させていた。教師は社会的な課題に対峙する児童生徒の変容を願いながら実践し、児童生徒が本音で話し合える場を設けることを重視する事例が複数みられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

既存の研究では、社会的な課題の教材を開発する研究はなされても、社会的な課題を取り上げるに至った背景を教師のライフストーリーから明らかにする研究はなされてこなかった。教師のライフストーリーに着目することで、教材化に至った経緯や教師の形成した希望、授業での工夫や配慮が明らかになった。こうした知見は、教師が社会的な課題を教材化する際に参照し得るものであり、国内外で持続可能な開発のための教育（ESD）を推進する上で意義がある。社会への問題意識をもちながら授業を実践する教師のライフストーリーは、自律した専門家としての教師の在り方を提起し、社会正義や民主主義を実現する教育を進めることにも寄与し得るだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to explain how teachers develop modules for classes and implement them when taking up social issues with close links to Education for Sustainable Development. In order to realize social justice and democracy, it is important to clarify how a teacher receives a problematic societal concern and develops it into class content. Therefore, this investigation was centered on the hope formed by teachers, and the life histories of seven teachers who took up social issues.

As a result, the following points of clarification emerged: The hopes of the teachers who took up social issues in class were directed society and the children; The teachers felt a strong sense of their mission as educators and their individual identities were also important contributing factors for their selection of specific issues; and The teachers' perspectives and teaching processes when dealing with social issues capable of being transferred to their raising of other social issues in their classes.

研究分野：教育学（教科教育学および初等中等教育学関連）

キーワード：教師 ライフストーリー 社会的な課題 授業 ESD 希望 切実性 実践習慣

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ライフストーリー研究と希望学の研究を背景にしている。

本研究の学術的背景として、第一に当事者の語りに着目するライフストーリー研究をあげることができる。ライフストーリーに着目した研究は、水俣病患者やハンセン病患者、被爆者など、様々な社会的事象を当事者の視点から明らかにしてきた。教師は、社会系教科の授業を中心に、環境問題や人権、平和といった ESD（持続可能な開発のための教育）にも関連の深い様々な課題を扱っている。実際に、水俣病やハンセン病、戦争体験を題材にした授業も数多く実践されてきた。教師は、社会的な課題の直接的な当事者ではない場合でも、課題を伝え共有する役割を担ってきた。これまでの社会科の授業論では、子どもに如何に切実性をもたせるのかに関心がむけられてきた。この一方で、教師自身が教材研究を行う中で、如何なる経緯で取り扱う社会的な課題に切実性をもつようになり、授業で扱う際の課題の見方・考え方を深めていくのか、という変容のプロセスは問われてこなかった。そのため、社会的な事象を授業で扱う教師の主体性をライフストーリーから明らかにする必要がある。

ライフストーリーを「人生についての語り」と捉えた場合、教師の人生についての語りを踏まえた研究には、教師の発達を明らかにした山崎（2002）や、高校教師の中年期の危機を明らかにした高井良（2015）の研究がある。また、教科に特化した研究に、国語科教師の実践的知識に着目した藤原・遠藤・松崎（2006）がある。社会系教科の研究領域でも、人生の来歴に着目する研究により、教師の力量形成の過程や教科観の形成要因が明らかにされてきた。ただし、力量形成に着目した研究では社会科の固有性が捉えにくく、教科観に着目した研究では実際に行った授業との関係が捉えにくいという課題がみられた。そのため、社会系教科の研究領域では、社会科教師に固有に求められる場面として、社会的な課題を教材化する過程に焦点を当てた研究が重要になると考えられる。国際的に ESD が重視されており、こうした国際的な教育の要請に応える上でも、教師が社会的な課題を授業化するライフストーリーを明らかにする必要がある。

本研究の学術的背景として、第二に希望学に関する研究をあげることができる。希望学とは東京大学社会科学研究所を基盤として 2005 年度より始められた新しい学問で、社会事象として希望を捉えようとする点に特徴がある。希望学の中で、リチャード・スウェッドバーグ（2009、p.61）は、希望を「具体的な何かを実現しようとする願い（a wish for something to come true）」と定義している。希望に着目した研究は、教育学の研究にもみられる。勝野（2010）や中妻（2013）は、教職を希望という視点から捉えることの重要性を論じている。こうした研究が進む一方で、授業を通してどのように希望が形成されているのかを明らかにする研究は行われてこなかった。

2015 年 8 月に教育課程部会 教育課程企画特別部会から出された「教育課程企画特別部会における論点整理について」では、日本の公民教育の課題として若者の社会への参画意識が他国よりも低いことがあげられていた。鈴木（2015）は、希望の有無と社会を変えられるか否かに関する見解の間には、強い相関関係がみられることを指摘している。従来の研究では、子どもに如何に切実性をもたせるのかということが課題になっていた。この課題に応え、学習者が社会への希望をもてるような授業を行う上でも、教師自身が如何に社会への課題意識を醸成しているのかを明らかにする必要がある。社会への希望を形成できるような授業を教師が如何に実践してきたのかという知見は、ESD を重視する各国においても重要な知見になり得ることが予想される。

以上のように、本研究では、ライフストーリーと希望学に着目した研究を背景にしている。本研究の核心をなす学術的問いは、「授業で環境や平和、人権等の ESD とも関連の深い社会的な課題を取り上げる際に、教師はどのように課題への切実さや見方・考え方を深めて希望（＝実現したい願い）を形成しながら授業を開発し実践してきたのか」というものである。この問いを明らかにすることで、社会的な課題を教材化する際に有効な視点や手立てを提示でき、次代を担う児童生徒に社会的な課題を提起するという教師の社会的な役割に寄与できると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、授業で環境や平和、人権等の ESD とも関連の深い社会的な課題を取り上げる際に、教師はどのように課題への切実さや見方・考え方を深めて、希望（＝実現したい願い）を形成しながら、授業を開発し実践してきたのかを明らかにすることである。

具体的には、インタビュー調査等を通して、①取り上げる社会的な課題を如何に選択したか、②取り上げる社会的な課題に対する切実さを教師自身は如何に形成したか、③取り上げる社会的な課題に対する見方・考え方を如何に深めたか、④授業で社会的な課題を取り上げることを通して実現しようとした願いは何か、⑤社会的な課題を教材化する際にどのような工夫や配慮をしたか、の五点に着目する。また、教師が社会的な課題を取り上げることの意義や教員養成への応用可能性を考察するために、⑥社会構造と教師の実践の関係、⑦教師の実践習慣と社会問題の教材化の関係、の二点を理論的に探究する。以上のことにより、教師が児童生徒に社会的な課題を提起する際に求められる教材化の視点と手立てを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

本研究の主な研究方法は、授業実践に焦点化した教師へのライフストーリー・インタビューで

ある。調査は、静岡大学の「人を対象とする研究に関する倫理審査」の承認を得た上で、調査対象者の同意を得て実施した。各教師に対して1時間から2時間程度の半構造化インタビューを1回行った。主な質問内容(表1)を依頼時に提示し、自由な発話の中で聴き取りを行った。

表1 主な質問内容

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・教師になるまでの経緯と、教師になってからの経験をお話してください。・社会系教科目の目標や変遷をどのように捉えながら、授業を実践してきましたか。・取り上げた社会的な課題は、どのような経緯から選択しましたか。・取り上げた社会的な課題に対する切実さは、どのように形成しましたか。・取り上げた社会的な課題に対する見方・考え方は、どのように深めましたか。・授業で社会的な課題を取り上げることを通して実現しようとしてきた願いは何ですか。・社会的な課題を教材化する際にどのような工夫や配慮をしてきましたか。 |
|---|

(2) 調査対象者について

調査対象者となる教師は、環境問題や人権など、ESDとも関連の深いテーマに関する授業実践を行った教師である。行った授業実践の概要が分かるように、学会誌や著書等に掲載されるような実践を行った教師や研究会等で実践を公開した教師を選定した。特に、児童生徒が社会に対して実現したい願い(=希望)を形成したような実践を選び、依頼した。COVID-19の影響でインタビューが実施できなかった期間については、刊行されている実践記録をもとに分析を行った。

環境問題については、東日本大震災による原子力発電所の事故を契機に実践をしてきた小学校のA教諭と中等学校のB教諭、海洋プラスチック問題を教材化した小学校のC教諭、ダム問題を取り上げた小学校のD教諭に調査を実施した。人権については、外国人技能実習生の問題を取り上げた小学校のE教諭、障がい者の家族の葛藤を当事者との対話機会を設けて実践した高等学校のF教諭、日本と東南アジアの社会問題に向き合いながらスタディツアーを実施してきた高等学校のG教諭に調査を実施した。また、COVID-19の影響でインタビューが実施できなかった期間に、刊行されている授業実践記録をもとに災害に関する授業実践の分析を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

ここでは、「2. 研究の目的」で提起した①～⑦の視点に即して論じる。①～⑤の内容は、主にインタビュー調査をもとに明らかにした社会的な課題を教材化する教師のライフストーリーに関する知見である。⑥⑦は、インタビュー結果のもつ意味を理論的に考察した知見である。

①取り上げる社会的な課題を如何に選択したか

東日本大震災といった直面した社会事象や、差別的な発言をする生徒との出会いといった日常生活での事象などが、社会的な課題を取り上げる直接的な契機となっていた。ただし、ある社会的な課題を教材として取り上げるか否か、課題のどのようなところに焦点化するかは、教師のアイデンティティや、これまでのライフストーリー(私生活、教員生活)の中で直面してきた葛藤や経験が背景にある場合が複数みられた。

例えば、A教諭とB教諭は、東日本大震災による原子力発電所の事故を契機に実践をしてきた。A教諭は、「社会科教師」としての責任感だけではなく、「都市の住民」として福島を犠牲にしてしまったという加害者意識から、都市と地方での受益と受苦の不正を問題視し、このことを考えられるような大人になってほしいという願いから授業を実践していた。一方、B教諭は、「社会科教師」としての責任感だけではなく、子どもの「保護者」として放射能汚染には無関心ではいられない状況になり、当事者意識をもつようになった。

このように社会的な課題を教材として選定する背景には、教師としての使命感だけではなく、自身のアイデンティティや、私生活も含めたこれまでの経験が関わっていた。

②取り上げる社会的な課題に対する切実さを教師自身は如何に形成したか

教師は、教師としての使命感や自身のアイデンティティ、私生活も含めたこれまでの経験から取り上げる社会的な課題に対する切実さを有していたが、社会的な課題を教材化するまでの探究過程の中でも切実さを深めていた。

社会的な課題を教材化するまでの探究の仕方については、文献等の読み込み、現地での調査、当事者と関連の深い人物との出会い、児童生徒とのやりとりによる教材の問い直し、複数の事例でみられた。例えば、B教諭の事例では、先行実践の文献を読む中で、「単に傍観者でいる自分でもいいのか」という問いかけに出会い、社会的な課題を授業で取り上げる責任や勇気を得ていた。また、実際に現地へのフィールドワークを行うことで、授業を行うことに対する自信を得ていた。さらに、実際に被害にあった当事者との出会いを通して、「当事者、被害者の人たちがいてもできるかどうか」といった授業への意識を高めるとともに、「忘れられてしまっただけで取り上げられなくなってる社会の在り方に対して問題提起したい」という願いをもつに至っていた。授業を実践して、思うような生徒の反応が得られなかったことも、新たな課題として教材を問い直し、次の授業を開発する契機になっていた。

以上のように、文献等の読み込み、現地での調査、当事者と関連の深い人物との出会い、児童生徒とのやりとりによる教材の問い直しといった、教師自身の探究の中で、社会的な課題を取り上げる切実さが高められていた。

③取り上げる社会的な課題に対する見方・考え方を如何に深めたか

社会的な課題に対する見方・考え方や実践方法は、一つの型として、他の社会的な課題を取り上げる際に転移されている事例が複数みられた。

例えば、A 教諭は、都市部と地方の不均衡といった受益圏・受苦圏の視点から、原子力発電所の問題だけではなく、米軍基地の移転問題も取り上げていた。B 教諭は、少数者の権利や人権をないがしろにして切り捨てているところに類似性を見出し、水俣病の問題と福島第一原子力発電所の事故に関する授業を実践していた。このように社会的な課題を捉える際の見方・考え方を、他の社会的な課題を取り上げる際に転移させている事例がみられた。

同様に、社会的な課題を扱う際の実践方法を、他の社会的課題を取り上げる際に転移させている事例もみられた。例えば、F 教諭は、当事者と関連の深い人物と対話する場面を、死刑制度の是非を考える授業や、障がい者差別を考える授業、労働問題に関する授業で実践していた。また、G 教諭は、訪問先や対象とする参加者を変えながらスタディツアーを実践していた。

以上のように、取り上げる社会的な課題に対する見方・考え方や実践方法は、他の社会的な課題を取り上げる際にも転移されながら深められていた。

④授業で社会的な課題を取り上げることを通して実現しようとした願いは何か

教師の願いから授業を通して形成しようとしてきた社会的な希望を捉えることができる。教師は社会的な課題そのものと児童生徒の変容を願いながら実践していた。

例えば、A 教諭は、「社会のことに関心を持ち続ける子になってほしい」という児童への願いから授業を実践していた。一方、B 教諭は、「人権と民主主義」をいかに根ざさせるかということをも重視して社会科の授業を実践しており、「同じ悲劇を2度と繰り返さないこと」という願いをもって、東日本大震災での原子力発電所の事故を取り上げていた。

以上のように、教師は、自身の教育観や教科観、社会への問題意識を基盤にしなが、児童生徒の変容、さらには、社会そのものの変化を願いながら、社会的な課題を取り上げていた。

⑤社会的な課題を教材化する際にどのような工夫や配慮をしたか

児童生徒へ社会的な課題を自分とかわりのある切実な問題として捉えさせるために、教師は様々な工夫や配慮をしていた。

例えば、A 教諭は、学習が自分にとってどのような意味をもっているのかを考えさせる時間を設けることを重視しており、学習に意味がないと考えている児童には、切実な問題と捉えた他の児童の意味づけを聴かせることを意識していた。B 教諭は、語ることに責任感を生み出すことにつながると考え、全員が自分の考えを語らなければならない状況をつくりだすことを意識していた。F 教諭は、「平和」「人権」「民主主義」といった言葉により、生徒が本音で話せない状況をつくってしまうことを否定的に考えており、誰もがもっている差別の感覚を赤裸々にし、本音で葛藤し当事者と対話することを重視していた。G 教諭は、振り返りの時間に自分の本音を大切にしながら新しい自分と出会うことを重視していた。

以上のように、複数の事例で、「本音」で児童生徒が向き合い、自分自身の考えを表明できるようにすることが意識されていた。こうした教師の意識は、児童生徒が社会的な課題に切実さをもってかかわれるようにするための手立てであると考えられる。

以上の①～⑤は、社会的な課題を教材化する教師のライフストーリーについて主にインタビューから得られた知見である。以下の⑥⑦は、こうした社会的な課題を教材化する教師のライフストーリーのもつ意味を理論的に考察した知見である。

⑥社会構造と教師の実践の関係

教師が社会的な課題を取り上げることの社会的な意義を理論的に解明するために、ミシェル・フーコーが1983年に行った講義の中で、古代ギリシアのテキストをひもときながら提起した「パレーシア」の概念に着目した。相澤(2011, pp. 59-60)は、フーコーの論じるパレーシアを構成する基本的要素を、①「真理」を言うこと、②「真理」を言うことに何かしらの「危険」が伴うこと、③危険を顧みずに真理を言う「勇気」、に整理している。フーコー(2002, p. 248)は、パレーシアに着目した背景として、「真理を語ること、真理を語る人を認識すること、真理を語る必要を認識することがどこまで重要か」という問題は、西洋の「批判的な」伝統の根源になったと論じている。したがって、パレーシアという視点から社会的な課題を教材化する教師に着目することは、社会を批判的に問い直す主体の形成を考察することにつながると考えられる。

本研究で実施したインタビュー調査の結果から、教師は、社会的な課題を取り上げる際に、社会や学校組織、社会問題の当事者、さらには児童生徒に対する自己の責任を危険にさらしながら、勇気をもって社会的な課題を授業で取り上げ、社会を批判的に捉え直そうとしていたことが明らかになった。また、児童生徒とは非対称的な権力関係にあるため、教師は児童生徒に直接的にパレーシアを行使するのではなく、児童生徒同士の対話や、当事者に近い者と児童生徒とによる

本音の対話の機会を設けていた。このように間接的にパレーシアを行使することで、教師は社会的な課題の伝達者としての役割を担っていた。

⑦教師の実践習慣と社会問題の教材化の関係

教員養成への応用可能性を明らかにするために、ブルデューの文化資本の三様態（身体化された様態、客体化された様態、制度化された様態）や社会関係資本などの論をもとに、社会的な課題を教材化する上で重要になる教師の実践習慣を考察した。

社会的な課題を教材化してきた複数の教師の事例では、社会あるいは児童生徒に対して実現したい願いをもつとともに、社会的な課題を教材化する上で各自が固有の実践的知識（見方・考え方や実践方法）を形成していた。そのため、社会的な課題を教材化する上で、公民的資質の捉え方も含めて社会科を教える意義についてのエトスや、実践習慣、社会の捉え方、授業化する実践的知識を身につけることは重要であると考えられる。

今回調査した教師の事例では、多くの教師が当事者と関連の深い人物と出会いながら教材を開発し授業を実践していた。そのため、社会的な課題を教材化する上で、教師の社会関係資本が鍵になると考えられる。金子（1992）は、「傷つきやすい」状態を意味する「バルネラブル」という概念に着目し、ボランティアは「自分自身ですすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされる」（p. 105）が、それにより人とのつながりができると論じている。教師が他者とのつながりを形成する際にも、バルネラビリティが重要になると考えられる。

（2）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

以上のように、本研究では次のことを明らかにした。教師は、①自身のアイデンティティやこれまでのライフストーリーで直面した葛藤や経験を背景に社会的な課題を選択し、②文献の読み込みや現地での調査、当事者との出会い等によって社会的な課題への切実さを深め、③課題を捉える見方・考え方や実践方法は、他の社会的な課題を取り上げる際に転移させていた。④教師は社会的な課題に対峙する児童生徒の変容を願いながら実践し、⑤そのためにも児童生徒が本音で話し合える場を設けることを重視する事例が複数みられた。また、⑥社会構造と教師の実践の関係については、「パレーシア」という概念に着目し、教師が社会的な課題について真理を語ることに、勇気を伴う、社会を批判的に捉え直す行為であることの一端を明らかにした。⑦教師の実践習慣と社会的な課題の教材化の関係については、教師の文化資本や社会関係資本に着目し、教師の社会関係資本やバルネラビリティが重要になることを明らかにした。

既存の研究では、社会的な課題の教材を開発する研究はなされていても、社会的な課題を取り上げるに至った背景を教師のライフストーリーから明らかにする研究はなされてこなかった。複数の教師のライフストーリーに着目することで、教材化するに至った経緯や、教師の形成する社会的な希望、授業での工夫や配慮といったことが明らかになり、教師が社会的な課題を取り上げることの社会的な意義や、重要になる教師の資質・能力の一端を解明することにもつながった。教師のライフストーリーをもとに明らかにした本研究の知見は、教師が社会的な課題を教材化する上で参照し得るものであり、国内外において持続可能な開発のための教育（ESD）を推進する上で意義があると考えられる。社会への問題意識をもちながら、授業を実践している教師のライフストーリーは、自律した専門家としての教師の在り方を提起し、社会正義や民主主義を実現する教育を進めることにも寄与し得るだろう。

今後の展望としては、どのようにしたら社会的な課題を教師が取り上げられるようになるかをより明らかにするために、社会的な課題の解決に取り組む教職以外の専門家との対比を通して、教職の固有性や他の専門家との連携の仕方を探究していくことが考えられる。その際には、資質・能力の形成過程の面だけでなく、真理を語る困難さや制約にも着目していきたい。

〈引用文献〉

- 相澤伸依、フーコーのパレーシア、東京経済大学 人文自然科学論集、130号、2011、55-69
勝野正章、「教師の希望学」にむけて、生活教育、No. 744、2010、54-63
金子郁容、ボランティアもうひとつの情報社会、岩波書店、1992
鈴木賢志、日本の若者はなぜ希望を持ってないのか、草思社、2015
高井良健一、教師のライフストーリー、勁草書房、2015
中妻雅彦、「緩やかなつながり、絆」で育つ教師、愛知教育大学研究報告 教育科学編、No. 62、2013、167-174
ピエール・ブルデュー、福井憲彦訳、文化資本の三つの姿、アクト actes、No. 1、1986、18-28
ピエール・ブルデュー、福井憲彦訳、「社会資本」とは何か、アクト actes、No. 1、1986、30-36
藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治、国語科教師の実践的知識へのライフストーリー・アプローチ、溪水社、2006
ミシェル・フーコー、中山元訳、真理とディスクール パレーシア講義、筑摩書房、2002
山崎準二、教師のライフコース研究、創風社、2002
リチャード・スェッドバーク、希望研究の系譜、東大社研・玄田有史・宇野重規編、希望を語る、東京大学出版会、2009、31-79

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 村井大介	4. 巻 406
2. 論文標題 社会科の授業は災害にどのように向き合ってきたのか 防災・減災につながる授業の視点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村井大介	4. 巻 51
2. 論文標題 社会的な見方・考え方を身につける教員養成の授業実践 学生は如何にして時事問題を読み解くのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井大介	4. 巻 韓国社会教科教育学会による大会 論集
2. 論文標題 社会科研究における教師の語りの意義と可能性：教師のライフストーリーの語りから教育言説を捉え直し希望を構成する（韓国語及び日本語）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会科質的研究方法論の活用、成果、役割(2018年夏季学術大会及び第8回韓・日学術交流会)（韓国語）	6. 最初と最後の頁 145-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村井大介	4. 巻 390
2. 論文標題 社会問題を学習する上で重要になる「切実」の二側面	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 考える子ども	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 社会問題の伝達者としての教師のライフストーリー 教師が授業で真理を語る「パレーシア」に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 社会的な課題を教材化する教師の実践過程と実践習慣 教師のライフストーリー研究を通して
3. 学会等名 日本社会科教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Daisuke Murai
2. 発表標題 The Life Stories of Teachers Using Social Issues in Class: Focusing on the Hopes of Teachers Attempting to Develop Teaching Materials on the Fukushima Nuclear Disaster
3. 学会等名 World Education Research Association 2019: Focal Meeting in Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 人との出会いを通して社会的な課題に向き合う教師のライフストーリー 当事者性を如何に共有するか
3. 学会等名 全国社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 社会科研究における教師の語りの意義と可能性－教師のライフストーリーの語りから教育言説を捉え直し希望を構成する－
3. 学会等名 第8回 全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会研究交流（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 社会的な見方・考え方を身につける教員養成の授業実践－学生は如何にして時事問題を読み解くのか－
3. 学会等名 全国社会科教育学会第67回全国研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村井大介
2. 発表標題 社会的な課題を教材化する教師のライフストーリー－教師自身が切実さを形成する経緯に着目して－
3. 学会等名 日本社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村井大介（日本社会科教育学会編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 15
3. 書名 教科専門性をはぐくむ教師教育（第2部第4章「教科の変容と社会科教師教育」執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------